

明治中期

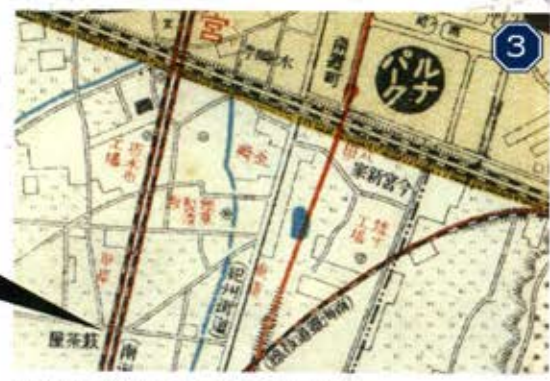
から末期の西成郡時代
 明治期の田園風景と鉄道が
 もたらした地域の変容

1868年～1912年
 (明治元年～明治45年)

①は現在南海(地上、1885年敷設)と、JR(土手、1889年敷設)の交差する新宮駅の1898年の状況である。敷設年の新しい当時の大阪鉄道が南海を写真のような土手で跨ぐことになった。そのため②の1900年刊行の「改正大阪市明良新地図」で見られるように、上町台地に掘削で作られた天王寺駅を出て西の低地になってから今宮駅にかけて、城壁のような土手が延々と出来てしまったのである。



③の「実地踏測大阪市街全図」(1912年刊行)では1898年の大阪府による大阪府外での木賃宿地区指定により、今宮村小字釜ヶ崎を中心に木賃宿が急速に進出し、焼酎工場、煙草工場などによる市街地化の進行が始まった状況がうかがえる。
 ④1907年に複線電化され、新たに設置された南海萩ノ茶屋駅付近の状況。おしゃれな駅舎であった。



④南海「萩ノ茶屋」駅

③「実地踏測大阪市街全図」(1912年刊行)

⑤1885年に開通と同時に南海鉄道(当時の社名は阪堺鉄道)天下茶屋駅が開業する。1895年刊行の「大阪市明細地図」では、天下茶屋公園や聖天、阿部野社の記載が見てとれる。



⑦紀州街道沿い、天下茶屋の明治30年代の状況であり、この是齋家の本宅は戦災で焼失し、現在の天下茶屋公園にあたる。



⑥明治30年代撮影である。背景が阿倍野区に位置する上町台地崖に位置する聖天森であり、海が見える山号を有した海照山正円寺への入り口の鳥居(境内の鎮守の森)が見える。手前が聖天下。



⑩木津川とその土手の明治30年代中頃の状況である。多くの帆船が往来している。土手にはハゼが植えられていた。



⑨木津川堤から東を見た津守新田の明治30年代中頃の写真である。新田の向こうに十三間堀川の土手があり、さらに遠方に上町台地、聖天森などが遠くに見える。



⑧南海鉄道を跨いで高野鉄道の蒸気機関車牽引の列車が走っている。1907年頃の状況である。当時交差点に駅は設置されず、高野鉄道はこの交差点の手前(右側)に勝間駅(のちの阿部野駅)を設けていた。

大正期
1912年～1926年
(大正元年～大正15年)

大阪市に編入される
までの西成郡
爆発的な人口増加、工場進出、
市街地の拡大

② 1903年頃から急速に市街地化した小字釜ヶ崎の宿が並ぶ状景である。現在の西成警察署から北に二街区目の道路を東から西にみたものである(1924年頃)。



① 津守村に立地した最大規模の工場である当時の大日本紡績津守工場の遠景(1924年頃)。戦災で焼失し、現在は西成公園、西成高校になっている。



④ 1919年刊行の「大阪市内および接続町村番地入地図」では、紀州街道の沿いの集落を挟んで、東側の天王寺村と、西側の今宮村で、日本最大級の耕地整理が行われたことがよく見てとれる。



⑤ 飛田新地設置(1917年)以前の田畑の広がる山王エリアを南から北を見た状景である。①地図にある天王寺村の耕地整理地区にあたり、この整理地区に生まれた飛田新地により、その後一気に市街地化する。

③ 1912年に創設された大阪自強館の本館、共同宿泊所であり、もと今宮小(閉校)前の紀州街道に面する玄関まわりの状景となっている。



⑥ 1924年に刊行された大阪パノラマ地図であり、現西成区北部の市街地化がかなり克明に描かれており、①で示した今宮村耕地整理で、北西部の矩形の市街地の登場がよくわかる。また煙突も多く描かれており工場の進出がよく見てとれる。



⑦ 生根神社には氏子の方が1970年に描いた「だいがく祭礼図」があり、1907年ごろの玉出の街並みを思い出として描かれている。現存する1基の「だいがく」は、岡山県での飛行場拡張の完成祝いに当時の保管役が持ち込み、戦災を免れた。

⑧ 現西成区を構成する、当時の今宮町、玉出町、津守町、粉浜村の人口の急増状況を描いたもので、明治中期の人口に比し、実に16倍となっている。中でも東京の渋谷町、西巣鴨町、滝野川町と並んで日本最大規模人口の町となった今宮町は、約30倍の人口増を示していた。

